

寂聴記念会だより

題字 島田聖翠

皆様、お変わりございませんか。
まぶしい新緑の季節となりました。
そして5月は瀬戸内寂聴さんの誕生月。お元気でしたら15日に百一歳になります。寂聴さんはこの爽やかな季節が好きでした。
初めに、今年の記念会の行事予定をお知らせします。

行事予定

6月3日 総会と文芸講演会

(徳島県立文学書道館 2階講座室)

・総会 午後1時より

・文芸講演会 午後2時～4時

(1) 「寂聴文学と吉行淳之介」「大根鍋の約束」の周辺」
大石征也 (文学研究家・記念会副会長)

(2) 「悲しみに殉じる」

米本浩二 (作家・記念会会員)

・出欠予定 別紙にて5月22日までに事務局にお知らせください。(メール・ファックス・葉書のいずれかで)
・当日は Zoom 配信します。Zoomで

参加希望の方はメールアドレスをご記入ください。

11月3日 寂聴忌朗読会

(文学書道館ギャラリー 午後1時半～)

・「美は乱調にあり」「諧調は偽りなり」を読む (予定)

朗読者 (川端恵美子・斎藤礼子・松尾清美・森君代・森裕子)

11月9日 (命日)

・機関誌「寂聴」2号 発行

・午前10時セレモニー

徳島市新町川水際公園の記念碑の前

・午後1時半より寂聴忌句会

文学書道館 2階 (出席希望者は事務局までご連絡ください)

11月11日 鎌田慧氏講演会

・「美は乱調にあり 大杉栄没後百年、現代社会への問い」

午後1時半～3時

文学書道館ギャラリー

鎌田慧氏 (1938～ ルポライター)

著書に『大杉栄 自由への疾走』『狭山事件の真実』『残夢―大逆事件を生き抜いた坂本清馬の生涯』など多数。

第2号

2023年5月15日

発行 瀬戸内寂聴記念会



生誕の地 記念碑

に記念会事務局にお申し込みください。

日程

・5月19日 (金)

午後2時～3時

・参拝のあと、瀬尾さんのお話を伺います。

・現地集合・現地解散

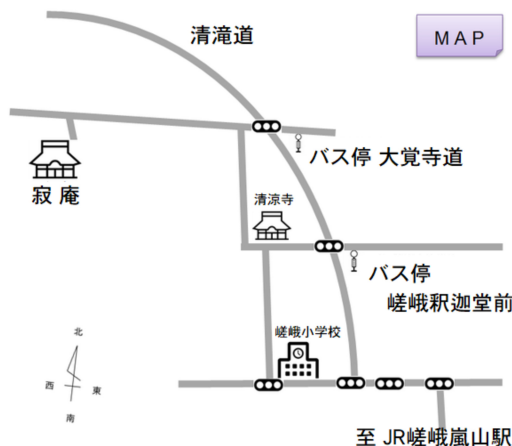
参加費 2000円程度 (現地で集金)

集合場所 曼陀羅山 寂庵

・京都市右京区嵯峨鳥居本仏餉田町7-1

5月19日 寂庵訪問

会員の中に「一度寂庵を訪れてみたい」という声があり、秘書の瀬尾まなほさん、法話会場に使っていたサガノ・サンガの担当・馬場君江さんにご相談したところ、快諾していただきました。
日程等は次のように決まりましたので、参加ご希望の方は、5月12日まで



交通アクセス

・京都駅からJR嵯峨線・嵯峨嵐山駅へ。北西に徒歩20分
・京都駅から市バス28番大覚寺行き「嵯峨釈迦堂前」下車(約1時間)、徒歩12分

瀬戸内寂聴記念会主催

「寂聴を詠む」俳句募集 2023

瀬戸内寂聴の三回忌にあたり、寂聴さんを偲ぶ俳句を募集いたします。その人柄、生き方、作品など、寂聴さんのすべてから感じ取ったものを、自由に詠んでください。どの季節であつても、季語がなくてもいいです。あなたの心の風景を表現していただきたいと思ひます。

この「寂聴を詠む」俳句募集は、寂聴さんの俳句の師でもある俳誌「藍生」主宰の黒田杏子さんに選者をお願いしたところ、大いに賛同してくださり、計画を進めてきました。ところが、黒田さんは3月13日に急逝され、急遽、「藍生」ゆかりの方々に選者をお引き受けいただいた次第です。

投句作品

ハガキ裏面に以下を記載してください。

- ・ 未発表作 一人一枚二句まで
- ・ 住所、氏名、年齢、電話番号
- ・ 所属結社（所属していれば）

投句料

無料

投句締切

2023年8月15日必着

賞

- ・ 最優秀賞 1句
- ・ 優秀賞 10句
- ・ 佳作 20句

投句先

瀬戸内寂聴記念会
〒770-0856

徳島市中洲町

340-802

発表

- ・ 10月末までに受賞者に通知し、新聞等で発表します。
- ・ 機関誌「寂聴」2号（11月9日発行予定）にも掲載します。



追悼

黒田杏子さん 齋藤慎爾さん

黒田さんとの出会いは1982年8月の「寂聴連」での阿波踊り。寂聴さんが黒田さんと画家の堀文子さんをお招きして一緒に踊った。二人とも男踊りでパワフルであつた。文学書道館が開館したのち講演にいらしやり、四国巡礼の途中でも立ち寄つてもくださった。その時「何でも協力してあげる」と励ましていただいた。

俳人・文芸評論家の齋藤さんも講演に来てくださり、徳島の古書店と一緒に訪ねた。寂聴さんの句集『ひとり』を出版し、『寂聴伝』『続寂聴伝』を執筆、寂聴さんとの共著もある。深夜叢書社をひとりで立ち上げた出版人で、本に囲まれて寝ているとおっしゃっていた。

お知らせ

瀬戸内寂聴記念会では、命日の11月9日を「寂聴忌」と呼んでいます。11月9日は、「偲びつついい句作ろう寂聴忌」のキャッチフレーズのもと、寂聴さんのふるさと徳島市で、ささやかな句会を開催する予定です。

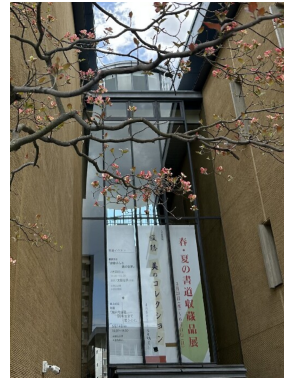


お二人とも3月に相次いで逝つてしまわれ、心細いことこのうえない。今頃、寂聴さんと一緒に俳句を作つておられるだろうか。（竹内紀子）

「寂聴 美の「コレクション」

徳島県立文学書道館で開催中

記念会理事の賀来真留加さんが取材し、note「瀬戸内寂聴記念会」にアップした記事の一部をここで紹介します。https://note.com/joyous_eel936/nb0d47acc314e



文学書道館 北玄関

現在、徳島県立文学書道館にて「寂聴 美のコレクション」展が開催されている（5月28日まで）。寂聴愛蔵の絵画、書、彫刻などの展示、そしてそれらの作品が寂聴の小説や随筆でどのように描かれたか、美術家との交流も含めて紹介している。

瀬戸内寂聴は東京、目白台や本郷のマンション、また出家後に暮らした京都の寂庵でも、お気に入りの美術品を身の回りに置き、創作のインスピレーションを得ていた。

その展示作品の中から、印象的なものをいくつかここで紹介したい。

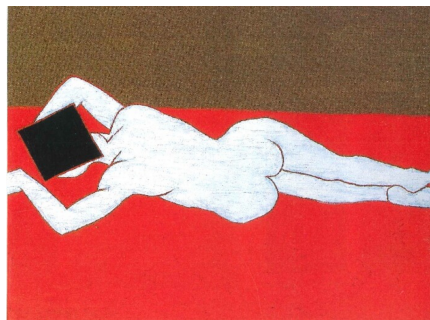
（作品は展覧会ハンフレットより）

熊谷守一 臥裸婦

小説『おだやかな部屋』にも出てくる油彩画。展示では下に小説の一文も

添えられており、その画と言葉の組み合わせから物語が立体的に立ち上がってくる。

体の線が妙に生々しい。熊谷の画風は、簡素な形態、明確な色彩、「モリカズ様式」と呼ばれた。実際の画自体の大きさは30センチほどで意外と小さい。『私小説』では表紙にもなった。



熊谷守一 臥裸婦

アラン・ダーカンジェロ

今回の展覧会のなかでもサイズとともに存在感が大きかった作品。（横1.5m、縦1mくらいあるかも）日本ではウオーホールほど知名度はないが、アメリカのポップアートの主要な作家、アラン・ダーカンジェロ。ハイウェイを平面的に分割、また標識などの記号をモチーフとし、管理された社会の虚無感を表現。（余談だが、徳島県立近代美術館では3点ほどダーカンジェロの作品を所蔵しているようだ）

寂聴は、この絵を友人から、全く画家の名前も知らずに購入した。部屋に飾ると無限に空間が広がったという。

デュラスの小説の余白のようなものを絵に感じる、と寂聴らしい感想。寂聴とポップアート。その組み合わせが意外にも嬉しい。



アラン・ダーカンジェロ
Aspen, Colo

他にも、池田満寿夫から送られた観音彫刻や、榊莫山の墨絵、岡本太郎による寂聴（当時は晴美）の肖像スケッチなど、展示の美術品は多岐にわたる。徳島は葉桜の季節。これから若葉芽吹

アラン・ダーカンジェロのこの絵について書いた寂聴の文章「その絵との出逢い」から一部紹介する。

私はこの絵が好きだ。デュラスの小説の余白のようなものがこの絵にあって、私の創造力を誘いだしてくるし、夢を無限に拡げてくれる。爽やかさ、クールなもの、五月の爽やかさと、十一月の冷たさが同居している。そしてその底からたちのぼる不気味な孤独感。

「芸術新潮」1970年6月号

太田治子さん来徳

「寂聴 美のコレクション」展開催に合わせ、4月22日に作家の太田治子さんが「寂聴さんと美の世界」の題で講演されました。太田さんは美術に造詣が深く、池田満寿夫の観音とロダン作のクロード・デルの頭像との類似、「日曜美術館」のアシスタント時代に出会った美術家の印象、高校時代に寂聴さんと軽井沢の別荘で泊まった話や、中野本町通りの蔵の家で涼太に会った話など、ユーモアを交えてなつかしく語ってくださいました。

「瀬戸内寂聴物語」発刊

徳島新聞に柏木康浩記者が1年間連載し、好評を博した「瀬戸内寂聴物語」が4月に刊行されました。

折々の寂聴さんへのインタビューや代表作の紹介に加え、たくさんさんの写真、年表、語録など盛りだくさん。寂聴さんの魅力あふれる、寂聴研究の入門書ともなっています。



柏木 康浩
徳島新聞

ひろば 会員のたより

出合い

森 裕子

このたび「寂聴を詠む」の俳句募集に、担当者の一人として関わらせていただくことになりました。他の俳句大会の要項などを参考にして、相談しながらチラシを作成しましたものの、どのくらいの応募数になるか見当がつかず、不安な出発です。投句の締切は8月15日です。皆様のご応募をお待ちしております。

4月1日2日に、山口県長門市で「みずぐコスモス交流会」が開催されました。4年前に初参加しましたが、その後コロナで中止が続き、ようやく今回、金子みずぐ生誕120年記念の会に、二度目の参加が実現しました。120名余りの盛大な懇親会では、徳島の絵本作家羽尻利門さんの「こだまでしょうか?」の絵が映像で流れ、郷土の作家に出会えたことがとても誇らしかったです。

次の日は、みずぐさんの法要が遍照寺で行われ、その後、講演会に向かう途中、講師の神田京子さんと話す機会がありました。こちらが徳島からと知ると、神田さんの方から、「徳島といえば寂聴さんね、ナレーションをしたことがある」と言ってくれ、タイミンがよく機関誌「寂聴」を手渡すことが出来ました。講演会の後に行われた講演は、金子みずぐの生涯を親しみやすく

明るく語るすばらしい舞台でした。

その会場で、歌手の吉岡しげ美さんと隣席になり、ドキドキしながら、話をしました。徳島にコンサートに来た時のことも、担当の竹内紀子さんのことも、よく覚えておられ、機関誌「寂聴」を手渡すことが出来ました。吉岡さんと一緒に仕事をされている映画監督で鳴門市出身の浜野佐知さんに、「寂聴」を渡してもらえることになり



羽尻利門 画 「棄天島」 — 「こだまでしょうか?」より
デイヴィット・ジェイコブソン 物語作 サリー・イトウ／坪井美智子 詩の英訳

寂聴のことば

社会に出て、自分自身に責任をとらねばならなくなった頃から、自分が所謂世間でいう所の幸福とは、至つて折り合いの悪い人間なのだという自覚が次第に明確にされはじめた。

人より多分な過剰な情熱(情欲とは断じて違う)をもてあましながら、なぜ世間の引いてくれる平穩の枠内におさまりきらないのかと、自分をふりかえることが度々身辺に起きたあ

ました。

みなさん、いろいろな女性の人生を歌つたり、語つたり、撮つたりしておられる方々です。寂聴さんの人生や作品に興味を持っていたとき、歌や、映画や、講演になつたら素敵だと、勝手に夢を膨らませています。

金子みずぐのふるさと長門市仙崎にはみずぐさんを愛する人々が集まり、残したい伝えたいという熱意が町中にあふれていました。寂聴さんの故郷徳島の人間の一人として、私も何かしたいと、改めて感じた山口への旅でした。

先日、徳島新聞で、寂聴さんの写真展の記事を読み、早速、展覧会会場に行ってきました。本当に楽しそうに笑う寂聴さんの写真にたくさん出合いました。写真家の西田茂雄さんに機関誌「寂聴」をお渡しできました。

げく、私は遅まきながらようやく気がついたのだ。

激んで水の動かないおだやかな淵の中では棲息し得ない魚のような自分の習性を認めないわけにはいかなかった。烈しくなだれ落ちる断崖の瀑布に逆つて鋭い鞭のような飛沫を浴びながら孤独に泳ぎ登る魚に自分をなぞらえたかった。

「幸福」より (1980年刊)

短編小説集『幸福』所収)

事務局長 竹内紀子

これからも、いろいろな方に出会い、寂聴さんのお話をし、一人でも多くの方に記念会に入つていただいたり、機関誌に投稿してもらえよう活動したいと思っています。

事務局からのお願い

・新年度になりましたので、
会費3000円の振込みをお願いいたします。

(阿波銀行 蔵本支店
普通 1229692
清重康代)

・機関誌「寂聴」2号の原稿締切りは9月15日です。皆様の投稿をお待ちしています。

瀬戸内寂聴記念会 事務局
〒770-0856 徳島市中洲町3-40-802
Fax 088-661-3292
email norikomizugame@yahoo.co.jp